

子どもの心理発達と絵本（Ⅱ）

——『まよなかのだいどころ』を解釈して——

三 沢 英 夫

は じ め に

Maurice Sendak は、この絵本の文章を完成させたとき、旧くからの友人に「新しい絵本の物語を書き終えたよ。そしてとても興奮しているんだよ。——まったく正常な作品じゃないんだ。ほんとにそう思うんだ。自分ではめずらしいことだがね。わたしのまんなかから生まれでたもので、それをしぼりだすのは地獄の苦しみだった。そうなんだよ。まさに分娩の痛さに通ずるものだろうと思うし、自分自身がそれほど子どもにかえることができるとは、とても思えなかった。ほんとにすごいんだ。」と打ち明けた¹⁰⁾。そうして出来上がった『まよなかのだいどころ IN THE NIGHT KITCHEN』¹⁴⁾は、彼が自称する3部作の2作目として1970年に出版された。

そのような Sendak の喜びにもかかわらず、この絵本も1作目の『かいじゅうたちのいるところ』と同様に、一部の教育者や図書館員たちを困惑させたようである。「たしかに（主人公の）ミッキーは、危険な目から逃げるのだが……ケーキといっしょに焼かれてしまうかもしれない危険性は、どんなかいぶつよりももっと気になる」と批判されたり、「はだかの男の子が、ねり粉のなかでころげ回ったり、ミクルのなかで泳いだり、そのほか、ひとによっては自慰的ファンタジーともとれるようなやり方でたのしんでいる……センダックは、子どもの性的感覚をとりあつかっているのだが、そのような感覚を認める準備のない人びとの感情を害することはまちがいない」と指摘されたり、その指摘どおりに主人公が物語の大部分を裸で、しかも性徴をあらわにしていることを気にして、絵本に絵の具でおむつカバーを描き入れた者さえいたようである。それに対し Sendak は、「そのくせ両親たちは、陰茎の折れたローマの彫像の見られる美術館へ、子どもたちをつれていくではありませんか。そのほうが子どもたちをこわがらせると思いませんか。」と答えている¹⁰⁾。

Sendak は、『まよなかのだいどころ』の方が『かいじゅうたちのいるところ』よりも好きだと言う。そのことについて彼は「表面に描かれたものの底に、はるかに多く語られているからです」、「『かいじゅうたちのいるところ』は、いまでは、わたしにはごく単純な絵本に見えます。——もしかしたら、その単純さがこの本を成功させたのかもしれないませんが、わたし自身は、二度とそのような単純さにもどることはとてもできません。『まよなかのだいどころ』の方をずっと気に入っています」と語っている。また、この絵本のテーマについて、彼は3部作が3作目の『まどのそとのそまたむこう』も含めて、同じテーマの変形であるとし、「そのテーマとは、怒り、たいくつ、恐れ、挫折感、ねたみなどのさまざまな感情を子どもたちがどのようにして克服し、彼らの生活の現実ととりくむか

ということです」と言いながらも、多くを語ってはいない。自分の心の内奥から「夜夢をみるように」湧いてくる感情に忠実に従って作品を描いている彼にとって、テーマが何かを「胸の内ではわかっている」にしても「口では言いあらわせない」のである¹⁰⁾。

そこで本稿は、この『まよなかのだいどころ』が深奥で語っている、Sendak 自身においても捉えきれてはいない内容を解きほぐしていってみたい。ここでもまた『かいじゅうたちのいるところ』についての第1報¹³⁾と同様に Jung 派の心理学理論に照合させていくが、それは、我々がそうすることによって表面で語られた事柄の奥にあるものを見通して解釈することができ、そのようにして解釈された内容が子どもたちの無意識によって感じ取られていると考えてみることもできるように思われるからである。

なお、この絵本の舞台は様々な食品の箱や瓶でニューヨークの摩天楼街を背景にした台所であるが、その箱のラベルなどに作者 Sendak の個人的な生活に関わる多くの事柄が書き込まれている。それらの個々の事柄や人名の意味については Lanes, S. G.¹⁰⁾と渡辺¹⁶⁾による紹介があるので、本稿では紙面の都合上、それらに関しては内容の解釈に大きく関わっているものだけを取りあげていくにとどめたい。

『まよなかのだいどころ』の心理学的解釈

葛 藤

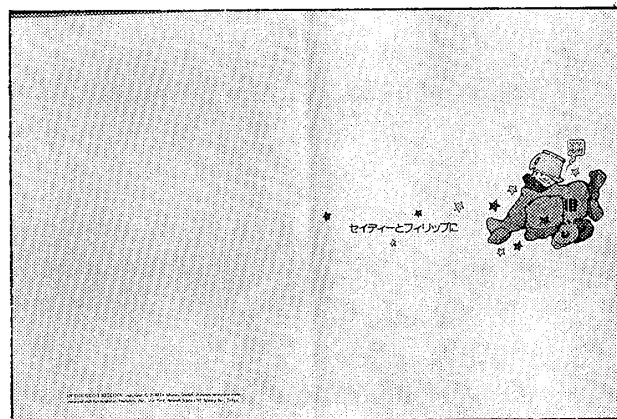
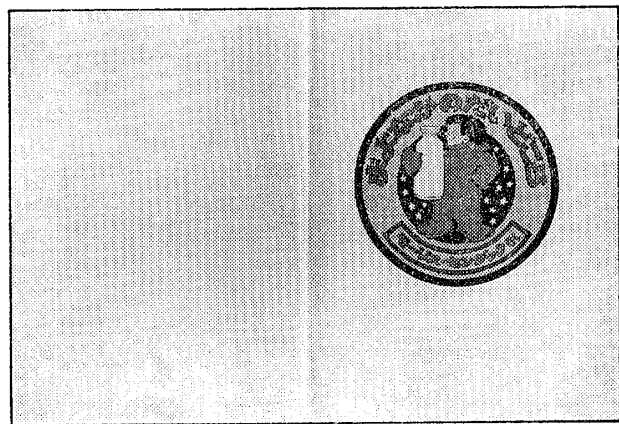
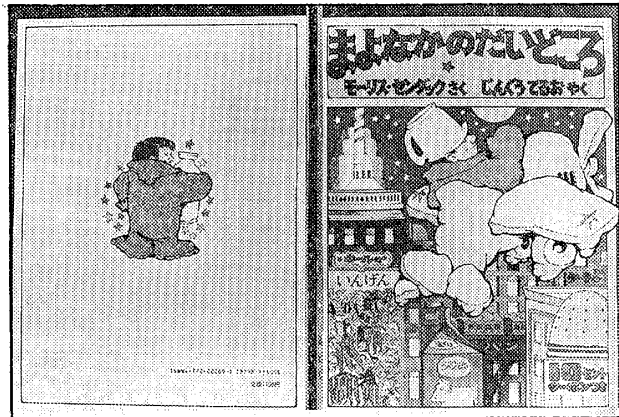
「ミッキーのはなし、しってるかい？ まよなかに あんまり さわがしいおとが するので どなたたら」と物語は始まる。絵では、ベッドに入っていたミッキーが起き上がり、「うるさいぞ しずかにしろ！」と叫ぶ。この時の「あんまり さわがしい おと」は、何を意味しているのであろうか。

ミッキーの寝室は、両親の寝室とは別の部屋である。子どもの寝室を子ども自身の領域として保証する習慣は、Sendak の住むアメリカにおいては一般的である。騒がしい音は、ミッキーの領分に侵入してきた音である。

そこで、主人公ミッキーを客観的に実在する一個人として、まずはとらえてみよう。すると音はミッキーという男の子以外の誰かが寝室の外でたてたものといえる。山中¹⁸⁾は、例えばひとつの考え方として、この音を幼い子どもの不安を惹起する両親の性的な場面の音であるとも考えることもでき、この絵本がそのような子どもに直接的な解答を与えているのではないが、話を台所へもっていき「ああわかった。だから朝起きると、パンとミルクがいつも飲めるんだね」という心の落ち着きをとおして安心感を与えている、としている。確かに、そのように考えることもできる。子どもは誰でも、両親の性的場面の音に不安を感じるし、両親は自分が眠っている夜に何をしているのだろうかと疑問を感じる。その不安は、Freud, S. によれば、健康に発達してきた男の子が、幼児性欲の現れ始めてきた3歳から5歳頃の男根期にピークとなるエディプス・コンプレックスと呼ばれる葛藤の中で感じる不安である。このとき男の子は、異性である母親を独り占めしたいと感じ、父親をその願望の妨害者とみなす。そのために父親に対して嫉妬や憎しみを強く感じてくるが、その反面、この時期以前からあった父親への愛・信頼のゆえに、男の子の父親への感情は愛憎両面的なものになる。こうして葛藤が生じる。このような葛藤の中で、男の子は自らの攻撃感情に罪悪感をもち、またそれ故に父親からの去勢不安を感じて、母親への願

望の充足を断念する。このとき男の子は妨害者としての父親像を心の中に取り入れて、そこに超自我が形成されていく。超自我は、のちに良心や理想形成においてその働きを示すものであり、それ故にここでの葛藤は、発達上乗り越えなくてはならない関門である³⁾。そうであるにしても、幼い自我にとって、この葛藤はやりきれない苦しみを伴う。現実自分が父親に取って代わることはできないと次第にわかってくれば、尚のこと、その葛藤の中でミッキーのように「うるさいぞ しずかにしろ！」とどなり、せめてそうしながら母親の独占を断念していくのかもしれない。また、それ故に、「パパとママがねているへや」はミッキーが立ち入ることはかなわず、「とおりすぎて」いかななくてはならない。読者の子どもは、無意識的に、この絵本が、君はやりきれない気持ちでいっぱいなんだね、だからぐっすり眠れないんだね、でも現実に君がお父さんに取って代わることはできないんだよ、と伝えているように受け取るのかも知れない。

ところで、ミッキーが「くらやみにおっこちて」いくときに時計の前を通るが、その時計は3時半を示している。一般的には両親も眠っている時間である。さらに「ママとパパがねているへや」(原語では SLEEPING TIGHT) とあるように、両親はぐっすり眠っている。したがって、今この時、現実にミッキーの両親が性的場面の音をたてているわけではない。また、もちろん現実のコックたちのたてている音でもない。いずれにしても、ミッキーの空想の中でのことである。Freud のいうエディプス・コンプレッ



クス自体、その時期にいる男の子の空想的産物なのである。

さて、現実には騒がしい音をミッキー以外の誰がたてたのかは、彼の空想の中のことであるので、無理に特定せずにおこう。現実にある事実は、ミッキーがそれに対し「うるさいぞ しずかにしろ！」と怒鳴ったことである。それは、誰かもしくは騒がしい音との葛藤があることを意味している。葛藤においてミッキーのとった態度は、聞こえてきた音よりも遙かに大きな声で衝動的かつ自分本位に怒鳴ることである。安眠を妨害する真夜中の騒音であるから当然といえば確かにそうであるが、自分の家の中の騒音なのだから、もう少し理性的な言い様があるはずである。もし音が両親の性的場面の音であったとすれば、父親に取って代わりたい願望にかられて実際的な処理、たとえば Freud が昇華と名づけたような社会的・道徳的に望ましいとみなされる処理をする程の理性・論理・思考もまだ十分に発達させられていないことになる。また、この怒鳴り声は両親の愛情関係に対する非常な嫉妬心のあらわれであり、その関係を破壊しようとする願望をふくむ。衝動的に否定的な感情を爆発させる傾向にある人間は、感情的態度を成熟させてはおらず、他者との実際的な関係性をもてず、葛藤を一層決定的にしてしまう。成熟した感情的態度は他者への共感や愛として現れる。エディプス・コンプレックスのようないわば自分の空想によって父を敵対視している男の子が、そのこわばった状況を解きほぐすのに必要なことは、この葛藤が生じる以前にもっていた父親への愛を、より発展した形で活性化させ、それと同時に現実を把握する思考力を発達させることである。さもなければ両親を初めとする他者との間に実際的な人間関係を樹立していけないことになるからである。このように考えると、ミッキーの課題は、無意識的な衝動・感情をコントロールする意識的な自我の理性・思考などの働きを強めることである。自我の感じる外的な現実との間における葛藤は、心の中の意識的な自我と無意識との間の葛藤である。その一つの現れがエディプス・コンプレックスといえる。

このことは、Jung のいう主体段階での解釈をすれば理解しやすい。すなわち、家の中全体はミッキーの心の全領域、ミッキーの領分である寝室は彼の意識領域、その主ミッキーは自我として捉えることができる。したがって、意識領域を区別している壁の向こうは、無意識の領域であり、聞こえてくる音は無意識からの圧迫である。圧迫に対してミッキーは、左右に並ぶ4コマ目の部屋の中を「うるさいぞ しずかにしろ！」という言葉で一杯にしている。心の中の怒りや憎しみをコントロールできず、それに圧倒されまいと怒鳴り声を出した自我は、その怒鳴り声が意識領域一杯にふくれあがってしまって、自らの居場所を無くすほどである。自我が葛藤を上手に解決できずに、怒鳴って抑圧しようとしながらも行き詰まった時、すべてを超越する無意識の力は、Jung⁴⁾のいう超越的機能を働かせ始め、自我が新しいものに変容する機会を与える。そこに自己治療的な夢や空想の象徴形成が生じるのである。葛藤はあらゆる新しいものの創造の前提条件である。

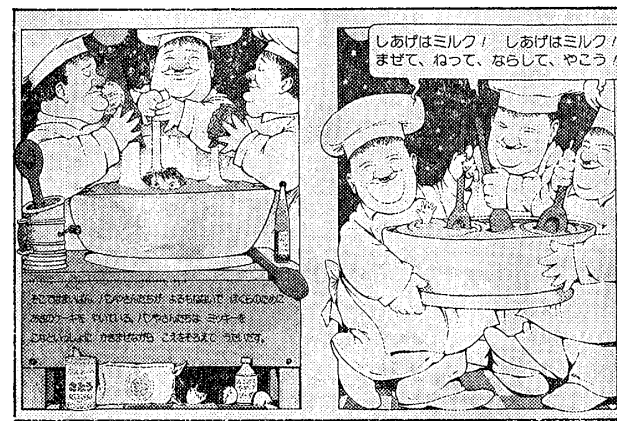
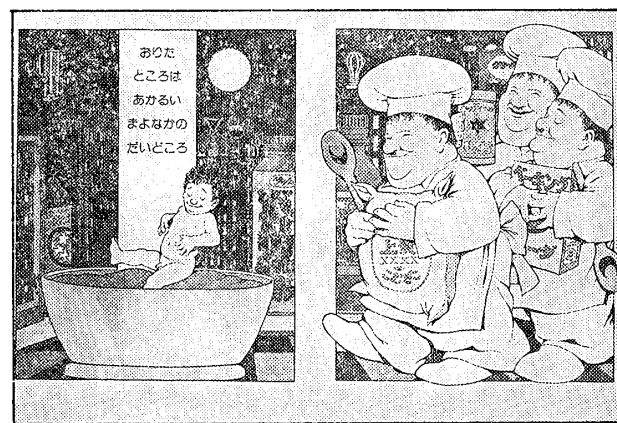
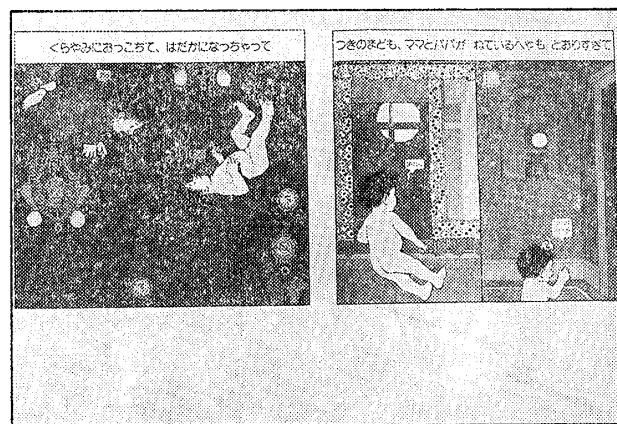
無意識の深みへの退行

怒鳴った後、ミッキーは「くらやみにおっこちて、はだかになっちゃって、つきのまども、ママとパパが ねているへやもとおりすぎて」いく。そうしてミッキーは想像の中で時を越えて葛藤の生じる以前の乳児期さらには胎児期の裸の時代へと心理的に退行し、そこで両親、特に母親の愛を得ようとしているかのように、「ママ！ パパ！」とかすかに

呼び掛けるが、両親の直接の応答はない。葛藤解決はミッキー自身の課題である。もし両親が応じたならば、ミッキーは葛藤を乗り越えることなく退行したままに留まってしまったかもしれない。しかしミッキーは、両親の部屋の前を通り過ぎて空想の世界「まよなかのだいどころ」へと下降し、それを願っていたかのように満足した顔でいる。

Jung⁹⁾によれば、性欲のみにかかわるのではなく、本能全般すなわち生命エネルギーとしてのリビドが抑制や妨害によってせきとめられると退行が引き起こされる。退行は常に心の過去へ向かう。エディプス期の近親相姦の禁止の結果退行していくリビドは、生後およそ1年から4年までの前性的段階、その特徴が栄養機能と性的機能とのさまざまな要素が入れ替わりながら混合していることにある段階に退行する。この時、近親相姦への恐れは、母親によって食べられることへの危惧に変わり、性的特徴を失う。さらにリビドは、その退行が妨げられなければ母のもとには留まらず、母をこえていわゆる意識以前の、出生以前の「永遠の女性的なもの」の世界、普遍的無意識の世界へ回帰していく。

ミッキーが時を超え、現実の空間をも超えて入ったところは、ミッキーの家の中であってないようなところである。ミッキー・自我は、自分の部屋・彼の意識の領域を出て、壁の向こうの彼家の中・彼の個人的無意識の世界へ、さらに、家の窓の外に見えた月が上空に輝く、家の外でありながら家の中のような台所・普遍的無意識の世界へと、意識の力では及びつかない何ものかに導かれて、生後身につけた服・



自我の持っている未成熟な機能は剝がされて、裸・純粹無垢な姿・本能的な生命エネルギーとなって、下降していく。それは無意識の深みから新しい機能を得て再生するための退行である。

「おりたところは あかるい まよなかの だいどころ！」（原語版では「？」がついている）。ミッキーの入ったところは鍋。子どもの容器としての鍋は子宮，そこに射し込んでいる光は男性性の象徴。退行したミッキーの新たな生に向かう受胎の瞬間である。また、真夜中は、昼間の葛藤に疲れきった自我に安らぎを与え、翌朝の新たな光へと送り出すところ。台所は、素材を洗って汚れを取り去り、必要な部分と不要な部分を切って分け、火にかけて調理して人の口に合う食べ物へと変容させる場、人の生命の糧をつくり出す場。ミッキーを受けとめた鍋も食べ物、生命のエネルギーをつくり出す容器である。そのいずれもが意識を生み出した母なる無意識の象徴であり、母性的女性性の象徴である。そこは養い育てて新たな力を与える場であるが、同時に火で焼かれ食べられてしまう危険をも孕んでいる。再生できるか否かは、主人公の取る態度による。

ここに3人のパンやさんたちが登場する。彼らの手にしているものは、大地の産物・大地の息子・太母の息子を象徴する小麦の袋、精神・知恵に関係している塩⁷⁾の缶、そして次のページで判るように、火の中で再生する不死を象徴するフェニックスと名づけられたベーキング・ソーダ(重曹)の箱である。それらに続いて鍋に加えられるのは、まずSendakの愛犬ジェニーの名、その誕生年と死亡年の書き込まれた袋の中身である。それは、宇宙の意の連結語コスモCosmという名、ウロボロスという時間も空間も、誕生も死も一体となったままのすべてが始まる前の状態に最も近いものの名を冠している。次では、始源の胚芽の状態を象徴する卵¹⁴⁾が、割られてミッキーの頭にかけておられ、それは世界の生成すなわち意識の誕生・精子と卵子の結合すなわち受精による子の誕生のプロセスが始まったことを意味していよう。そして、ママのベーキング・パウダーは字句どおり母性的なものを表すのであろうし、それ故にSendakの母親の似顔絵付きである。一筋の閃光とともにミッキーが入ったのち、さまざまなものが渾然一体に混ぜ合わせられたねり粉は、天と地の創造以前・子どもの誕生以前のウロボロスの状態に、まず光・精子・精神が射し込み、そして天と地・自と他・意識と無意識が分かたれ、そこに生命・個人・自我が誕生し、養う母なるものの力によってそれが育てられていく、そのプロセスとそのため要素とを含んでいる塊といえよう。すなわち、この「ねり粉」は、世界創造・人間個人の誕生・自我発生の過程における可能性を潜在的に有している原初の状態の象徴と思われる。退行の過程の中で生命エネルギーとなった自我・ミッキーは、ウロボロスの「ねり粉」の段階にまで至ったのである。

ウロボロスから分離する自我

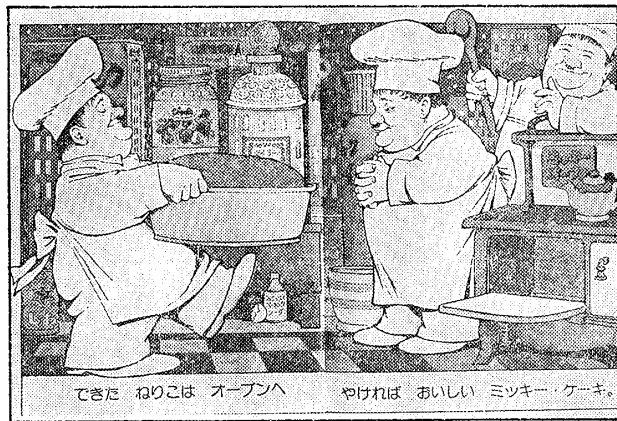
変容の場「真夜中の台所」の3人のパンやさんたちは、満月の輝く星空を背景にした摩天楼の都市で働く者たちである。月の象徴は非常に多義的ではあるが、この絵本では他の諸象徴との関係で女性的なものの象徴として捉えられる。背景の都市もまたこの台所にいるものたち総てを包み込んでいるものとして、母なるものの象徴である⁹⁾。すなわちパンやさんたちは、母なるものに仕え、母なるものの一部である。

彼らは産まれたままの姿・身体そのもののミッキーを粉と一緒にかきまぜる。そこは、

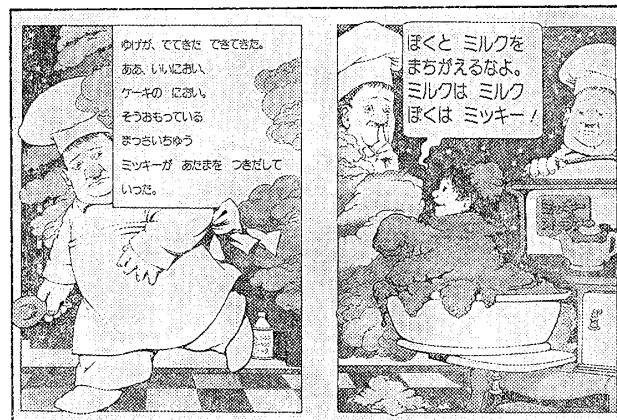
まさに Jung 派の Neumann, E.¹¹⁾¹²⁾の言う始原の「身体的ウロボロス」と「食物ウロボロス」の状態である。ねり粉はオーブンに運ばれて焼かれる。オーブンは母なるものの喰り食う口でもあり、また子を産み出す子宮でもある。その中で、湯気が出て、いいにおいがしてくる。もしミッキーがいいにおいの中で気持ちよく焼かれて、ミッキー・ケーキとなったならば、パンやさんたちが仕えている「喰り食う母なるもの」に食べられて、生まれ出すことはない。それは、Neumann の言う、「母権的去勢」であり、これによってもたらされるものは「男性的な自我意識体系の喪失・自我の収縮と低下」である¹²⁾。始原の、母子一体の、すべてが充たされている楽園・子宮・ウロボロスから自己を主張して生まれ出なければ、そこに人間個性の発達はない。

ウロボロスから自我が生まれてくるためには何かが行われる必要がある。その一つが攪拌による回転である。それは、箱庭治療過程でよく現れる円運動、さらには人間の精子と卵子が結合した際に生じる受精卵の回転運動にもつながるものであり、新生に先立つ必要条件の象徴といえる。また、もう一つはオーブンの火であり、火はねり粉の内部に興奮を起こす。燃焼は元素として入れ込まれていたものを孵化させる。出てきた湯気は、息吹、呼気、煙、言葉と同様、精神的な男性性が育ってきたことを意味していよう。

孵化したミッキーは、ねり粉から頭を出して「ぼくと ミルクを まちがえるなよ。ミルクは ミルク ぼくは ミッキー」と主張する。頭は精神・意識・自我の象徴である。頭はウロボロスから抜け出て、主張することによっ

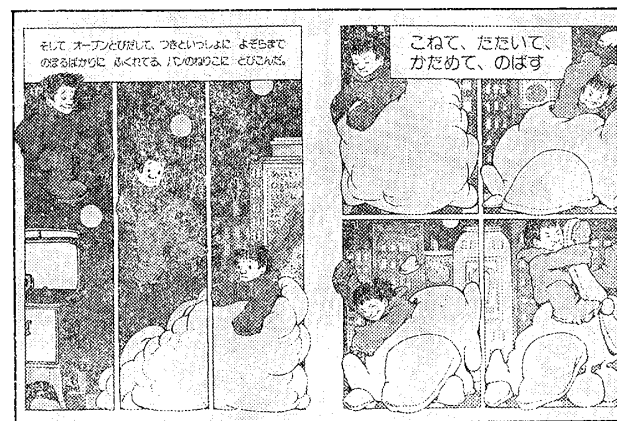


できた ねりこは オーブンへ やければ おいしい ミッキー・ケーキ。



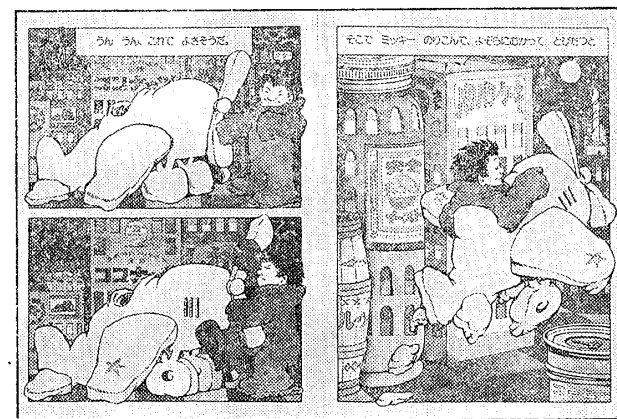
ゆげが できた できた
ああ、いいにおい
ケーキの におい
そうおもっている
まっさいちゆう
ミッキーが あたまを つきだして
いった。

ぼくと ミルクを
まちがえるなよ。
ミルクは ミルク
ぼくは ミッキー!



そして オーブンとひたして、つかもつしよに まるままで
のまわりからい ふれてる、10ののりこに とびこんだ。

こねて、たいてい、
かだめて、のばす



うん うん、こねて まるまです。

そして ミッキー のりこに、まっさいちゆう、とびこんだ。

て今や非自我・無意識となったものに対して自分を区別する。「自己意識化とは、いやそもそも意識化とは、否を言うことから始まる。……すべてを結びつけ、すべてを渾然と溶かし込む無意識が『これがおまえだ』と言うのに対し、『それはわたしではない』と言うことこそ意識の決定的な反撃なのである」¹⁴⁾。ミッキーがこれを行うためには、火で焼かれる「儀式」を恐れることなく越える必要があった。火を乗り越えることは、言葉とともに、動物的な無意識性・衝動性に対する人間の意識のコントロールを象徴するものだからである。生死に関わる事でまちがえられたにもかかわらず、ミッキーは恐怖や怒りの情動に圧倒されることなく、善悪を未だ知らない純粋な無邪気さをもって主張している。

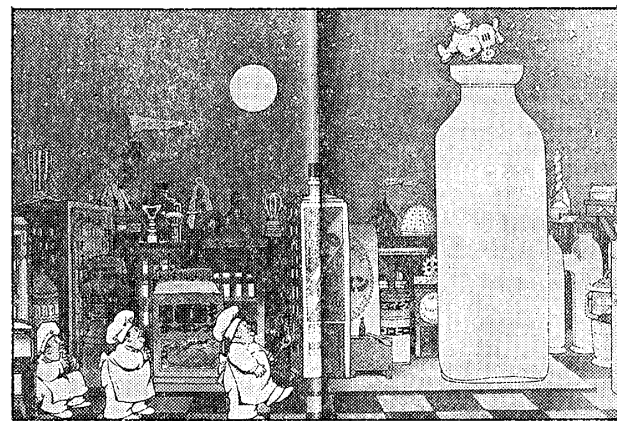
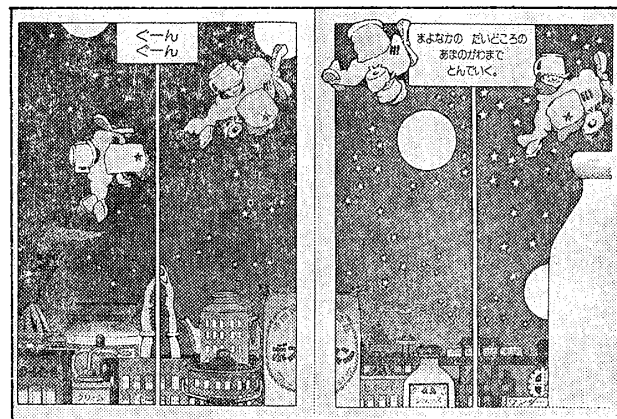
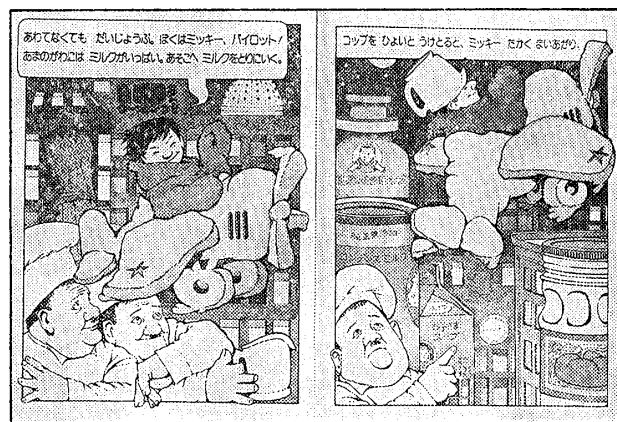
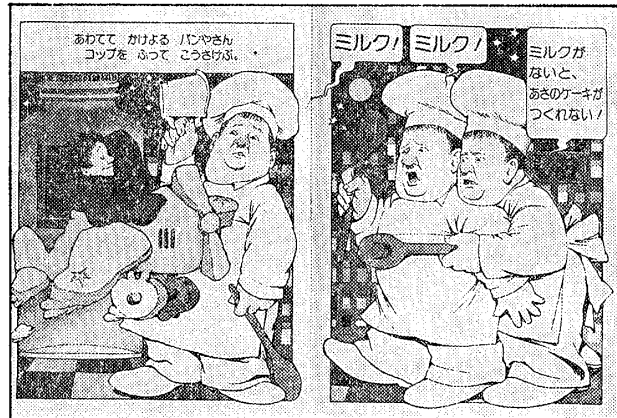
退行して生命エネルギーとなっていた自我の胚芽は、この意志をもった主張によって自我となり、オープンを飛び出す。「行動と意志の中枢」¹⁵⁾が自我である。この時の服装は、表面的には軍隊の雑役兵ととらえられようが¹⁰⁾¹⁶⁾、心理学的に言えば、これから始まる「パンのねりこ」との格闘に必要な強固な意志、規律正しさを身につけたことの表現、すなわち上なる頭・意識が、下なる身体をすっぽりと手足も出さずに包み込んだ服・無意識を統御しうることを象徴していよう。オープンを勇んで、しかし眼を閉じて飛び出したミッキーは、眼という意識の知覚器官を開いていれば別の所に降り立ったのかも知れないが、またもや、今度は「よぞらまで のぼるばかりに ふくれている パンのねりこに」飛び込まされてしまう。背景の看板に Sendak が〈チェイス〉と書いたのも必然と言える。追撃、狩猟を意味する〈Chase〉は、分離した自我が快を感じても無意識は不快を感じ、自我を追いかけ狩り取ろうとし、そこに闘いが生じることを示しているからである。自我は「おやっ」と気づいてうんざりしながら思案しているのも束の間、ねり粉を「こねて、たたいて、かためて、のぼす」。自我は、自分を再び呑み込もうとしてきた母なる無意識から自由を勝ちとる闘いを英雄的に始める。そうすることで自我は、かつて母なるウロボロスの中にいてなされるがままであった状態・女性的受動性から、再びそこに戻れることを拒否し闘う男性的能動性を堅固にしていく。この母なるウロボロスからの分離、無意識の制御は、「母の世界を去って父の世界へ向かえ」という標語¹²⁾のもとに苦闘の中で進められる。苦闘する自我を父なるものが援助しているかのように、〈フィリップ〉の横にあってミッキーを見守るのは〈ユージーン〉である。それが、癌で苦しむ Sendak の愛犬ジェニーを苦しみから救う際に手助けした友人の名であることを考えると、Sendak が単に落書きをしているのではないことが解る。この闘いを越えて、自我は、ウロボロス状態から母なるものと父なるものを区別し、精神的男性的原理を目標にして自らを創造していく。それ故、Sendak の母の名セイディーは「こねて、たたいて、かためて、のぼす」の陰に退き、〈フィリップの最高級〉と父の名をつけたトマトの看板が目立ってくるのであるし、同じページ内で同じトマトの看板でありながら、母と父の名が分けられているのである。

父なる世界へ向かう自我

こうして男性性・精神性を自らの力と感じた自我は、さらに上なる精神性・父なる神の特性に向かうための飛行機を、呑み込もうとしてきたウロボロス、正確に言えば誕生した自我にとっての無意識から、創り上げる。この創造は、無意識を単に恐れたり、敵視することを超えて、それを自分の目的に合う形へと新しく秩序づけるという自我のあるべき姿

を示している。創り上がった飛行機の背景に Sendak の誕生日が書き込まれたのは、このような自我の無意識からの自立を意味している。出来上がった飛行機に乗り込んだミッキーは、夜空に向かって飛び立つ。原語では「……Mickey……was just on his way」と書かれているように、ミッキー・自我は、まさに自分自身の道を歩み始めた。これらを現実生活の親子関係で言えば、子どもが親に呑み込まれまいとして何事においても反抗する時期を越えて、個人として誕生することである。とすれば、Sendak の両親の名は、先述したような個人的な母と父を超える心の中の元型的な「母なるもの」と「父なるもの」の象徴でもあろうが、子どもの自我の闘いがいつしか現実の個人的な母と父に対してなされていることを表しているのかも知れない。このような自我・英雄の闘いは、神話やお伽噺の中では竜との闘いとして表現されている。「英雄はカオスに対抗して、すなわち原母的な充溢と自然の怪物性に対抗して光と形と秩序をもたらす者である」¹¹⁾。

いずれにせよ、こうして自我は、呑み込まれる恐れから自分を守ることにエネルギーを費やすことなく、他者の要求にも耳を貸す余裕を得る。そこに、パンやさんたちのミルクがないという要求を聞くミッキーの姿がある。しかしミッキーがミルクをとりにいくのは、彼らから要求されたからではない。彼は、頼まれる以前に、いわば本能的に何かに導かれているように、飛行機を創り、それに乗って飛び立っていて、パンやさんたちが知らなかったミルクの在処に向かっていて、その途中で頼まれ事・彼らの悩みをついでに



引き受けたのである。それは、ミッキー自身のためであり、そのための飛行機である。Neumann¹²⁾によれば、意識が無意識を打ち負かして、それから分化した際に生じた無意識の不快は、意識化されないままではおらず、自我に罪悪感を持たせる。自我は、無意識の苦悩をも引き受け、この罪悪感を克服していこうとすることによって、より成熟していき、そうすることで人格の統合を進めていくのである。Sendak は、ミッキーが台所に降り立ち、これから意識が現れてくる前に、すでに一人のパンやさんに塩を持たせて、自我の引き受けていく苦悩と統合の喜びを暗示していた。塩は、Sendak たちユダヤ民族にとって「苦しみと神との協調」のシンボル¹⁶⁾なのである。

ミッキーは当然のことに「あまのがわには ミルクがいっぱい。あそこへ ミルクをとりに行く」と言う。原語では「I get milk the Mickey way」である。後のページでは、Milky Way (天の川) となっているが、ここでは Mickey way である。まさに Milky Way に行くこと、それが Mickey way、自我の進むべき道であることを示している。それは自らの内的な意識と無意識の統合に向かっている道であり、それと同時に、個人と外的な社会、男性集団との間で交わされた約束を守る責任と道徳を取り入れた道でもある。こうして、個人の発達における社会適応が始められていく。

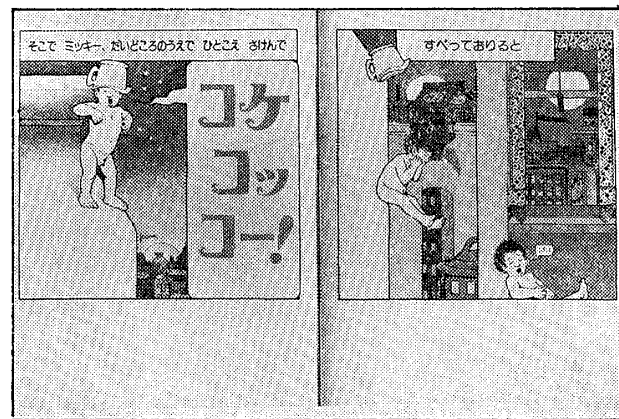
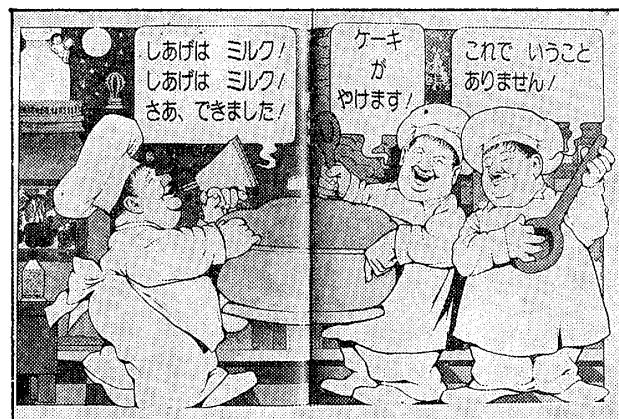
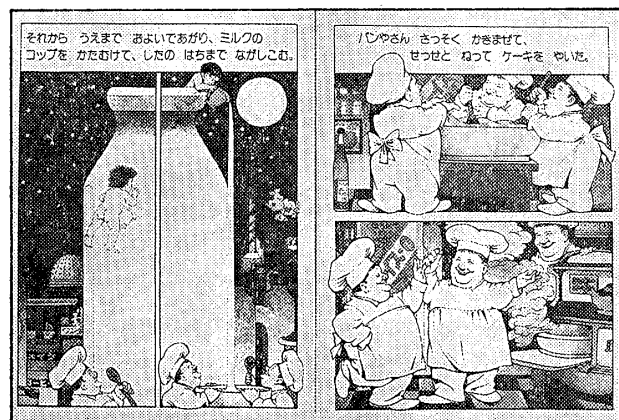
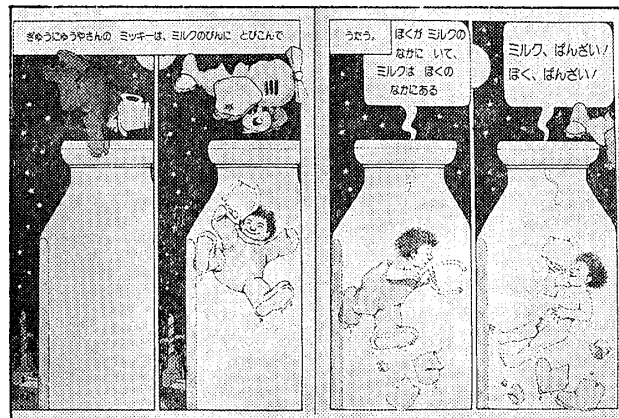
この時のミッキーは自分をパイロットであると言う。もともと彼は、光・精神によってねり粉に導かれ、そこに生み落とされた。その精神によって自我をウロボロスから分化させた。そして精神を極みにまで高めようと飛行機で飛び立ったのであった。その場面の背景にはくのぼりそうにふくらむ安全イースト¹³⁾がある。自我はあまりに高く飛翔しきって自分を光によって生んだ神と同一化して自我肥大させることなく、パンやさんたち、すなわち地上の世界・現実の世界、これは同時にミッキーの心の中の無意識の世界であるが、との繋がりを保ちながら作業を安全に行わねばならない。

ところで3人のパンやさんたちは何を表しているのであろうか。さまざまに考えられるが、ここで理解しておく必要のあることは、彼らがミッキーとは異なる存在だったということである。ミッキーは自分がミルクではないと判る意識を持ったが、彼らは粉の中のミッキーを見分けることも、「しあげはミルク」と言いながらも最初から入っていたミッキーをミルクと混同したか、あるいは最後にミルクを入れ忘れたにせよ、自分たちでそれに気づくこともなかったように、状況を捉える眼・意識・精神を持っていない。ねり粉の中から言葉を発したミッキーに対し、一人は逃げ、一人は冷ややかな視線を向け、もう一人は口に指をあて沈黙を要求している。彼らの規準では、自己主張は恐ろしいこと、タブーであった。「意識化の可能性を生きていない人は、意識化に向かおうとする他の人の一切の努力を曖昧にし、不確かなものにしようとする」¹⁵⁾のである。彼らは、自我を無意識から分化させることも、個人として独立することもできないまま、同じ顔をもつ集団として母なるウロボロスに盲目的に仕え、母なるものの「養い育てる」働きではなく、それと表裏一体をなす「何でも構わず貪り食い破壊する」働きのみを、無自覚に行使している者たちであった。彼らに必要なものは、ミルクがない現実を把握する自我と意識、そしてまさに養い育てるためのミルクの働きである。さもないと生命にとって基本的な糧であるパンを作れないのである。そのような彼らにとって、ミッキーは救い主となる。それは同時に、ミッキーが自分の心をも救うことでもある。

父との同一化・男性性の獲得

さて、ミッキー・ミルク, Mickey way・Milky Way という言葉の対は、それらが緊密に関係し合っていて、互いに惹き付け合い、補い合っている一つの全体性を創り上げるはずのものであって、その出会いが物語の結末に至る契機となるものであることを想像させる。自我が手に入れねばならない大切なもの、人間が全体として発達するうえで、それが欠けると片手落ちになるもの、それがミルクに象徴されているのであろう。しかし、ミルクへの道がミッキーに拓かれたのは、彼が精神方向へと高まっていった英雄の自我意識となったからこそである。それに対し、パンやさんたちは、彼らを現実の個々人として客体段階で解釈すれば、隔絶された無意識の中に心の中のミルクを埋没させ、それ故に、自分の世界のことながら、そこにミッキー・英雄が現れて彼に促されるまで、それによって自我を生み出すまではミルクが見えなかった人々である。彼らをミッキーの心の中の無意識の住人として主体段階で解釈すれば、たとえ見えていたにしても、彼らはミルクを取り出す高みに飛翔することはできない。ミッキーの心の中でそれができるのは、そしてそうせねばならないのは、自我である。しかしそれは簡単な事ではない。恐ろしいものに呑み込まれて後、それに圧倒されることなく純粋無垢な姿勢で対抗し、それを自らの力として取り入れ、それをコントロールできるようになった英雄としての自我であるからこそ、天・精神の方向へと進むことができるのである。

さて、ここにおけるミルクとMilky Wayは何を表しているのであろうか。



それは、ミルク瓶の下に〈ワンダー〉とあるように、なんとも表現しきれないほどに多義的な象徴のようである。

まず、Milky Way (天の川) は天に輝く星群である。自我はそれに惹き付けられる。それは、闇の中の星群が、ウロボロスの闇から自らを分離させた自我にとって、同一視の対象だからであろうか。とにかく自我は、意識の力を駆って、天・光・精神・英雄へと近づこうと上昇する。ミッキーが最も高みに達した時、この絵本では見開き一杯に、台所の世界が描かれている。上昇は、意識の人格全体に及ぼす力の強化ならびに範囲の拡大を意味し、これに伴って自我は無意識の世界の全貌を見ることができるようになるからである。今や、自我は、人格内の無意識を、そして外的世界を秩序づける意識的な力を発達させた。ミルク瓶に自ら意識的に飛び込んだミッキーは、「ぼくが ミルクの なかにいて、ミルクは ぼくの なかにある」と言う。この巨大なミルク瓶は、その外的特徴からファロス・男性性器・男性性を表すといえる。上昇してここに飛び込んだミッキーの言葉は、自らの中に精神性・男性性を得た自覚から発せられたものである。この言葉は、「わたしが父にあり、父がわたしにおられることを、あなたは信じないのですか」(ヨハネの福音書14章10節) というイエスの言葉に重ねて Sendak が用いた、と指摘した研究者もいたとのことである¹⁶⁾。確かにそのような一面での解釈もできる。その心理学的に意味するところは、自我の「大いなる精神——父との同一化」である。それは「無意識から去って意識と思考へ向かう人類発達の父権的傾向を考えれば」理解することができるし、それは「無意識という包み込み覆い尽くす領域から自我意識と個人を解き放してくれる」のである¹⁷⁾。だから、自我・ミッキーの身体を覆っていたねり粉の服は剥がれ落ちる。

しかしそれは自我肥大という危険性も孕んでいる。自我肥大・自我の精神との同一化とは、Neumannによれば、意識体系が精神の側面によって圧倒されてしまう「父権的去勢」である。意識が「消化しきれない精神内容や無意識に属するリビドーで一杯になる」ため、「この過程がもたらすものは誇大妄想・自我意識体系の過大膨張」であり、ここにおいては人格内の「女性的側面が貧困」になるという¹⁸⁾。ミッキーは、自我肥大を起こしたのであろうか。そうではなかろう。ミッキーは、上昇の際に頭に被ってきたコップによって、自分の頭の大きさにちょうど見合う分だけ、天の川の精神をすくい出したのである。そしてミルクは母親に関わるという面でも、水という面でも女性的な象徴であり、ミッキーはそれを得ている。それらは自我肥大に陥ったミッキーを表してはいない。

統合に向かって・もう一面の女性性の獲得

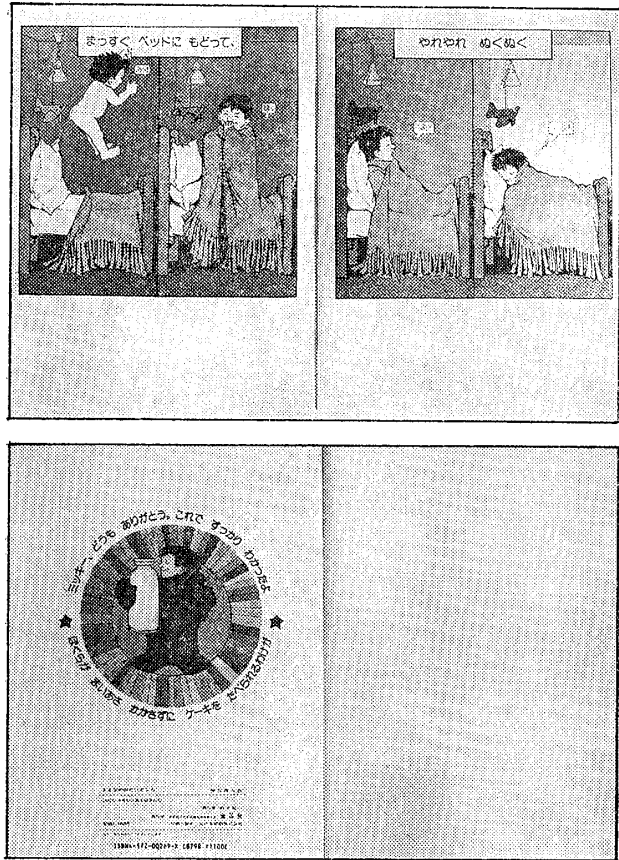
ところで、巨大なミルク瓶・ファロスは、その働きの面では、生とリビド(心的エネルギーの中でも、創造する力として)の源、創造し奇跡を行うもの、生きものを、それもやはり暗いところで産出するもの、再生力の象徴である⁹⁾。そこに世界中で生殖力のシンボルとされて崇拜される理由がある。しかし、ミッキーについての再生の奇跡は、まだ明らかになっていない。これまでは、ミッキーの到達点を、Milky Way とミルク瓶を手懸りに、意識が精神性・男性性を高める過程として捉えてきた。そこで残されてきたミッキーの対話の一方、人格の全体的な発達を互いに補い合っているとされるもの・ミルクの象徴しているものについて考えてみよう。

ミルクは純粹無垢な白色の液体である。ミッキーがこれを飲んだことは、物語の初めに

見られたミッキーの自分本位に怒鳴ったり、現実から離れて舞い上がって傲慢になる危険性、大いなる神との同一化・自我肥大に陥る危険性を孕んだ自我意識が、無垢なミルクによって浄化されたことを意味している。その両面が人間には必要である。無垢でありすぎても、傲慢でありすぎても現実的ではない。その両面をもつことによって、必要に応じて謙虚であり自己主張できる自我が育つ。それ故、聖書の中でよく知られている言葉が暗示されるように使われながらも、「父」ではなく「ミルク」に変えられている。この点で、聖書という言葉がそれほど普及していない我国においても、「父」と「乳」の音が同じであることは、興味深い。

それはさておき、聖書との関わりで言えば、「あなたがたも悔い改めて子どもたちのようにならない限り、決して天の御国には、はいれません。だから、この子どものように、自分を低くする者が、天の御国で一番偉い人です。」(マタイの福音書18章3・4節)、「生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、みことばの乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。」(ペテロの手紙Ⅰ・2章2節)とあることも考慮せねばならないだろう。それらは悪に気づく精神性を高めた後に、「内的な誠実さを再び獲得すること、この中核ないし内奥の誠実さに戻る道を見出す」¹⁵⁾ことが、人格の全体的発達であることを意味している。この絵本では、その道が Milky Way として表されていたのである。

精神性を高めた自我意識の在り様に応じて、無意識は自我を呑み込み破壊する水としての性格ではなく、養い育てる水・ミルクとしての性格を現す。ミルクは人間の最初期を養い育てるために必要不可欠な、乳児の欲求に応じる母から与えられる生命の水でもある。養い育てる働きは、ミッキーをオープンで焼こうとした無意識と、傲慢になる危険と背中合わせの自我との両方に取り入れられる。さらに、ミルクは、母の肉体から出される液体・物質である。ミッキーは、「母なるねり粉」から生まれた物質であり肉体であるが、パンやさんたちという男性、男性であるということと父性的でもある者から出される物質的ではない精神的な関わりの中で、眼に見えない故に物質ではない自我意識・精神を生み出し、それを堅固に育ててきた。しかし、今や精神はミルクという物質と分かちがたく一体化した。ミッキーが心身一如の精神的かつ物質的な存在として育っていくためには、父性と同時に母性も必要である。ここで言う父性と母性は、絵本の中に現実の父親と母親が現れて来ないように、個人的現実的な両親に限定されるものではなく、むしろミッキーの人



格内の存在である。このような解釈によれば、今やミッキーは男性的父性的な支配性・攻撃性・精神性とともな女性的母性的な服従性・受容性・物質性の両面の力を、自分の中に取り入れたのである。これは、意識と無意識の心全体を養い育てる力を取り入れたことになる。

統合・自己との出会い

さて、以上のような様々な両面性を獲得したミッキーは、以前のミッキーではない。統合的な人格として生まれ変わった。ねり粉の服が剥がれ落ちることは、新しい生への脱皮である。この再生の奇跡を引き起こしたミルク瓶は、見つけ出されてみれば、真夜中の台所・変容の場であって、ひときわ高く大きく、神々しく輝き、この世界を明るく照らしているものであった。ミッキー・自我とパンやさん・無意識界の住人は、これによって同じ目的を持つに至った。意識と無意識、男性と女性性、個人と社会、その他のあらゆる対立項を結び付ける中心、それは究極的には、Jung 派で自己 (Self) と呼ばれるものである。それは、意識の中心としての自我 (ego) とは区別されて、意識も無意識も含めた人格の中心点として想定されている。自己は、「対立を統一するもの、葛藤の帰結、エネルギー的緊張の『作業』、人格の生成、最も個人的な一歩前進、次の段階とでもいべきもの」¹⁹⁾である。「全体性の象徴」「結合の象徴」としての自己は、「自我を堅固にしようとする意識の構えと、それに対抗して意識を圧倒せんとする無意識の傾向との間にある、エネルギー的内容的緊張を克服する」ものであり、「あらゆる葛藤を、それが真摯に生き抜かれるかぎり、創造的過程の中で癒すばかりでなく、人格全体を拡大するための出発点ともする」のである²⁰⁾。

このような人智を超える超越的な働きを成す自己は、自我にとっては「心理学的には神の像のひとつであり、経験上神の像と区別できない」¹⁹⁾。そこで、自己は、神、キリスト、神的存在としての老賢人などの姿をとって象徴的に現れることになる。ミッキー・自我がミルク・自己との繋がりを果たした時、自らを完全な存在と感じる自我は「我と父なる神は一つ」というキリストの言葉をもって、それを表現した。自我は自己の子・神の子としての自覚を得たのである。

自己は、圧倒的な無意識や外界の要求に屈しない意識の構え・自我の堅固さと明確さがあればこそ、それをより高度に統合させる結合の象徴として現れる。その意味では「容易には手に入らない宝」である。しかしまた、それは人間誰しもの心の中に生まれながらに存在している宝である。それは、ミルク瓶の右下にある箱に〈純正〉とあるように純正なものとして、自我の純正な態度によってすくい上げられるものである。また、瓶の下にある看板のように、〈ワンダー〉・驚くべきもの・不思議なもの・奇跡を行うものであり、〈いちばんはじめで いちばん やすくて いちばん じょうとう〉(原語版では FIRST CHEAPEST BEST と明瞭に読み取れる) なるものである。

物語の初めで葛藤から逃げることなく積極的に対応した自我は、無意識の深みへと降下し、幾たびかの試練を経て、最終的に自己と出会う全体性への道を迎って、人格内のあらゆる対立を統合する宝を得た。まさに、「しあげは ミルク」であり、こうしてミッキーの个性的人格という「ケーキ」が創られていくのであり、問題は総て解決し「これで いうこと ありません」となる。ミッキーは、新しい自我として、「だいどころのうえて」

・無意識の上で、つまり意識の世界の王として、また無意識とも隔絶することのない自己の子として、英雄時代に聖なる宝を得るために渡されたコップ・「聖なる杯」⁶⁾・自己の象徴を王冠として頭に戴く。そして「コケッコォー！」と、勝ちどき・新生の産声を高らかにあげる。声の赤色は、王位を象徴する緋の色である。また、Jung が人格の完成・自己との同一化を目指す努力を読みとった中世の錬金術の作業過程の中で、最高の成果は赤い色の「賢者の石」⁷⁾であるとされていることを想起させる。

東の空に上ってきた曙光は、新生の象徴。一仕事終えたミッキーは、新生の興奮のうちにすべって降りる。窓の外に<Q. E. ゲイツヘッド>、Sendak がイギリスで心臓の発作に襲われて入院したゲイツヘッドという町のクィーン・エリザベス病院の名が見える。危うく死に至るところであった体験から生を得たのは、ミッキーも同様である。Sendak 同様ミッキーも、自分のベッド・現実の世界に戻った。

このように解釈をしてくると、絵本の前扉と後扉に描かれたミッキー・マウスの紋章画に似た絵も、単に Sendak がミッキー・マウスを好きなゆえではなく、もっと意味深い無意識的な動機によって描かれたことが解る。それは、これまで解釈してきたような、ウロボロスの闇から意識が誕生するまで、無意識的な心に自我が意識の明瞭な光をもたらすまで、枠でしっかりと閉じられた心の在り様からもっと柔軟な開かれた心になるまで、というような変化の過程の前扉と後扉なのである。

葛藤の解決と発達

人間は、その生を全うせんとする過程において、葛藤を避けて通ることのできない存在である。人間を人間たらしめている意識性の存在それ自体が、始源のウロボロスから分離した時以来、葛藤を孕んでいるからである。葛藤に対して真摯に向かう中で意識的存在としての人間の発達がある。現実生活の中で多岐にわたる葛藤も、根源的には、当人の心の中の意識と無意識との葛藤と言える。この絵本の中でミッキーは、葛藤を心の最も深奥で解決する道を示している。それは原始時代から現代を超えて人類が意識性を獲得していく道でもあり、集団の一体性に埋没せずに個性を発達させていく道でもある。

Jung 心理学では、個人の発達を巨視的に見た場合、人生前半では、意識の中心に自我を据えて、無意識をも含めた人格の全体性が犠牲にされる危険を孕みながらも、自我の形成と発達が必要であるとしている。したがって、そこではミッキーが絵本の前半で行なったように、男性的父性的な自我の形成、男性集団との同一化による規範や道徳の学習が目的となる。それは女兒においても同様である。自我の働きは、物事を整理し秩序づけるという男性原理に従うものだからである。母なる無意識への憧憬は再び呑み込まれまいとする自我によって捨てられ、父性的なものが目指される。そのような意識の片面的な発達は、この絵本の後半に展開されているような、無意識の中に本来的に含まれている統合作用を働かせる自己に自我が結びつくことによって補償される。それが葛藤を根源で解決する。この自己が自我に意識化されていくのは一般に人生後半の発達課題であるにしても、この働きは子ども時代においてもなされている。例えば Jung 派の Wickes, F. G.¹⁷⁾ の紹介した「僕には友だちがいる。それはキラキラ星みたいに小さくて、真っ暗闇みたいに大きいんだ」「それが真っ暗闇の真ん中に座っているのを見つけると、僕がしなけれりゃならないことをしっかりつかんだ気がして安心するんだ。そして、真っ暗闇もやっぱりぼく

の友だちなんだなって思うんだ」と言った子どもは、絵本の裏表紙で星に囲まれているミッキーと同様、無意識の暗闇で輝く自己との出会いを持っている。神秘的な結合の象徴は、例えば幼児期の Freud が注目した男児のエディプス・コンプレックスも女兒のエレクトラ・コンプレックスも解消する。それらは、Jung, そしてその理論を発展させた Neumann によれば、「母なるもの」に呑み込まれる「母権的去勢」と「精神」に圧倒される「父権的去勢」という不安の表面的な現れだからである。

この絵本は、ミッキーという英雄をもって、子どものみならず、我々大人の心の中にいる英雄を呼び覚ましなが、日々の葛藤を根源で解決する方途を、さらに人間の一生涯にわたって続く心の発達の内様を、そしてそれが根源では同じ事であることを象徴的に語っているのではなかろうか。

おわりに

『かいじゅうたちのいるところ』では、第一反抗期を迎えたあたりの男の子マックスの、自分を呑み込もうとする無意識内の太母に立ち向かう時の英雄としての姿が描かれていた。『まよなかのだいどころ』では、やはり英雄の姿ではあるものの、マックスよりも年長の子が抱える様々な葛藤の根底にあるものに立ち向かうミッキーが描かれている。しかもその過程は、ある一時期のものではなく、人間の発達の根底で一生涯にわたってなされる作業でもあった。Sendak にとって、『かいじゅうたちのいるところ』が『まよなかのだいどころ』に比べれば、表面的に思えることは至極もったもなことである。

この絵本はあまりに心の深層に働きかけるものであって、我々の意識が理解できる物語の表面的な筋のおもしろさを超えているのであろう。それ故に、この絵本は『かいじゅうたちのいるところ』よりも大人にとっては親しみにくいのであろう。しかし、まだ意識を一面的に発達させてはおらず、無意識という心の深層と慣れ親しんでいる子どもたちは、この絵本の伝えてくる内容を、純粹に心の深層で受けとめているのではあるまいか。

引用・参考文献

- 1) Barton, A. (1974) 馬場禮子 (監訳) 井原・三上・三沢 (訳) 1985, フロイト・ユング・ロジャーズ, 岩崎学術出版社
- 2) Birkhäuser-Oeri, S. (1977) 氏原 寛 (訳) 1985, おとぎ話における母, 人文書院
- 3) Freud, S. (1923) 井村恒郎 (訳) 自我とエス (1970, 改訂版フロイド選集・4 自我論に所収), 日本教文社
- 4) Jung, C. G. (1921) 高橋義孝 (訳) 1976, ユング著作集1 人間のタイプ, 日本教文社
- 5) Jung, C. G. (1933) 野田 倬 (訳) 1982, 自我と無意識の関係, 人文書院
- 6) Jung, C. G. (1951) 池田絃一・鎌田道生 (訳) 1985, 心理学と錬金術 (I), 人文書院
- 7) Jung, C. G. (1951) 池田絃一・鎌田道生 (訳) 1986, 心理学と錬金術 (II), 人文書院
- 8) Jung, C. G. (1954) 林 道義 (訳) 1982, 元型論, 紀伊国屋書店
- 9) Jung, C. G. (1952) 野村美紀子 (訳) 1985, 変容の象徴, 筑摩書房
- 10) Lanes, S. G. (1980) 渡辺茂男 (訳) 1985, センダックの世界, 岩波書店
- 11) Neumann, E. (1971) 林 道義 (訳) 1985, 意識の起源史 (上), 紀伊国屋書店
- 12) Neumann, E. (1971) 林 道義 (訳) 1985, 意識の起源史 (下), 紀伊国屋書店

- 13) 三沢英夫(1987) 子どもの心理発達と絵本——『かいじゅうたちのいるところ』を解釈して——, 白梅学園短期大学紀要, 23, 85—105.
- 14) Sendak, M. (1970) *IN THE NIGHT KITCHEN*, Harper & Row, Publishers, Inc.
神宮輝夫(訳) 1982, まよなかのだいどころ, 富山房
- 15) Von Franz, M-L. (1974) 氏原 寛(訳) 1982, おとぎ話における悪, 人文書院
- 16) 渡辺茂男(1984) すばらしいとき, 大和書房
- 17) Wickes, F. G. (1927; 1955) 秋山さと子・國分久子(訳) 1983, 子ども時代の内的世界, 海鳴社
- 18) 山中康裕(1986) 絵本と童話のユング心理学, 大坂書籍
- 19) 新改訳聖書刊行会(1979) 聖書, 日本聖書刊行会

みさわ ひでお(心理学)